

公演名: フランソワ=グザヴィエ・ロト指揮 レ・シエクル《春の祭典》	公演日: 2018年 6月12日
媒体名: 朝日新聞(夕)	掲載日: 2018年 6月18日
発行元: 朝日新聞社	縮小率: % C P



池上直哉氏撮影

評

「春の祭典」
ロト指揮レ・シエクル

聴きなれない音の至福の響き

指揮者フランソワ=グザヴィエ・ロトが、自身の組織した楽団レ・シエクルと一夜だけの日本公演を行った(12日、東京オペラシティコンサートホール)。20世紀初頭のパリの音楽につい

て全く新しい像を示す「古楽」の最前線。プログラムには、当時のパリのオーケストラで使われていた管楽器の解説が付され、使用楽器の一斑が並ぶ。マニアックではあるが、会場は満席で、年齢がいつもよりかなり若い。

前半はドビュッシーの「牧神の午後への前奏曲」「遊戯」、そしてラヴェルの「ラ・ヴァルス」。いずれもパリで一世を風靡したディアギレフのロシア・バレエ団に因縁のある作品。「牧神」冒頭のフルートからいつもより淡く、しかし繊細に層化された響きに一気に引き込まれる。ロトの音楽は、基本的に速めのテンポで、パルスが軽い。聴く方も耳のレベルが引き上げられたように感じ、普段聞こえたことのない音が聞こえてくる。それがこのレ・シエクルの場合、聴きなれないフ

ランス式のバソン(ファゴット)の音だ。つたりするから、至福の経験だ。

前半の各曲はそれぞれにすばらしいのだが、とりわけ「ラ・ヴァルス」で不穏な雲の中から、夢のように洒脱なワルツが浮かび、時に助けを求める叫びのように立ちのぼったりするさまは忘れられない。

後半はストラヴィンスキーの「春の祭典」。ここに「痙攣」はある。コントラストも衝撃もある。だが、20世紀の演奏が重視してきた重く、引きずるような拍は現れない。力を誇示して格好つけるところもない。とりわけ第2部の前半、いつもなら混濁してよくわからないような場面が、詳細に描き分けられて、滅法面白い。こういう演奏を実現してしまったことには脱帽するしかない。

(伊東信宏・音楽評論家)